

第3学年 国語科学習指導案

山梨大学教育学部附属中学校 富高 勇樹

【授業の概要】

「高瀬舟」は、3つの「語り」(①3人称視点により「語り手」が出来事(高瀬舟での庄兵衛と喜助の出来事)を語る「語り」、②庄兵衛を視点人物として出来事(庄兵衛が捉えた喜助に対する認識)を語る「語り」、③喜助の直接話法(独白)による出来事(喜助の弟殺しに対する認識)を語る「語り」)によって、4つの場面で構成されている作品である。生徒は、視点人物である庄兵衛に寄り添いながら、作品を読み進め、庄兵衛によって捉えられた喜助の言動をきっかけとして、知足の考えや安楽死について、自分の考えをもつようになることが予想される。初読の感想をもとに、喜助の犯したことは罪なのかどうかということを課題としていくことも考えられるが、生徒の「喜助」に対する理解・認識(疑問や不可解さ)を基に、「喜助」という人物をし、捉え直す学習課題を設定する。『「喜助」の直接話法による語り』に着目し、「喜助」の出来事(弟殺し)に対する理解・認識に迫ることで、初読時に捉えていた「喜助」との違いに気づき、生徒自身の読みの変容、深まりが促されると考える。

【キーワード】 語り 語り手 批評 対話

1 単元名・目指す言語能力

『喜助』とは、いったい何者なのか?
～表現に着目し、対象と言葉を問い直し、作品を読み深める～

2 教材名 森 鷗外『高瀬舟』 (光村図書「国語3」)

3 生徒の実態

第3学年1組、男子20名、女子19名の計39名のクラスである。1年次から担当する生徒たちである。国語の学習に対して、意欲的であり、交流活動などを積極的に授業に取り入れているので、考えを交流する際などには積極的に発言する生徒も多い。また、家庭学習として行っている新聞を使ったワークシートにも真面目に取り組んでいる。

文学的文章を読む活動では、「心情を表す語句などに注意して読むこと」、「描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容を理解する」など多くの生徒が文中の語句に注意しながら、内容を理解することはできている。1年次の『少年の日の思い出』の授業では、「少年の日の思い出」の授業では、『大人になった』『少年の日の思い出』の「語り」に着目し、作品を読み深める～「ワールド・カフェ」に取り組み、作品の問いかけに応える～という言語活動を設定し、作品の構成と表現の仕方に着目して、作品を読み深める活動大人になった『僕』(客)から『私』(主人)への手紙を書こう」という言語活動を設定し、作品の構成と表現の仕方に着目して、作品を読み深める活動を行ってきた。また、2年次の「走れメロス」の授業では「作品の言葉の秘密に迫ろう～「悪い夢」について考え、作品を読み深めよう～」という言語活動を設定し、作品の「出来事・人物の心情」などの内容の理解だけでなく、「出来事がどのように語られているのか」「語り手がどう語っているのか」「なぜ、そのように語っているのか」と「語り」に着目して、「言葉」によって、どのような世界が描き出されているのか、また語られた作品世界が読み手に何を問いかけているのかを考えることで、生徒自身の読み(認識)の変容、深まりを実感できるような授業を行ってきた。

3年次には、文学的文章の授業(『握手』)では、『握手』という作品はここを読み!～構成や表現から、作品に対する読みを深める～という批評活動を行ってきた。生徒の初読の感想や授業後の批評文などを見ると、読みの観点として「語り」に着目する記述や疑問など多く見られるようになってきた。生徒には作品を「出来事・人物の心情」(どのような出来事か・人物がどのように思ったのか)の読みから、「語り」(語り手がどのように語っているのか、語り手がなぜそのように語っているのか)に着目した読みにまで広げ、作品に描かれた世界が自分にとってどのような意味・価値をもつのかを考えさせたい。そのような読書経験の積み重ねが、読書が自分の生活と結びつき、生徒の読書生活をより豊かなものとしていくと考える。

4 指導の内容と言語活動、教材の関わり

(1)「言語活動を通して知識技能を活用させ、思考力・判断力・表現力等を育むための手だて」

「高瀬舟」は、読書教材として、教科書に採用されている。「高瀬舟」は、3つの「語り」(①3人称視点により「語り手」が出来事(高瀬舟での庄兵衛と喜助の出来事)を語る「語り」、②庄兵衛を視点人物として出来事(庄兵衛が捉えた喜助に対する認識)を語る「語り」、③喜助の直接話法(独白)による出来事(喜助の弟殺しに対する認識)を語る「語り」)によって、4つの場面で構成されている作品である。

生徒は、視点人物である庄兵衛に寄り添いながら、作品を読み進め、庄兵衛によって捉えられた喜助の言動をきっかけとして、知足の考えや安楽死の問題について、初読の感想をもつことが予想される。

以下は指導者のこれまでの実践での生徒の初読の感想(人物について)の抜粋である。

庄兵衛

- ・同心の庄兵衛の視点で書かれていて、罪人の喜助が話し終わったときの心情が細かく書かれていたり、自分と喜助を比較してわかったことなどが書かれている。喜助の話聞いた庄兵衛がこの罪に疑いが出てきたが、同心という下級の役人なので、オオトリテエに従うしかないというあきらめの考えだったのでかわいそうだと思った。
- ・物語が、庄兵衛が喜助の心情についての疑問と喜助の犯した罪の疑問と出庄兵衛が喜助に対しての思いが変わった。喜助の心情を知った庄兵衛が彼を敬っている。喜助が犯したことはほんとうに罪なのか、庄兵衛が少し、死を望んだ弟を殺した彼を哀れんでいる。
- ・喜助には罪があったのかという庄兵衛の考えは現代でも考えなくてはならない。

喜助

- ・喜助が最後に弟を殺してしまうところで、役人などが捕まえにくる間、弟の顔を見つめているとあるが、はたから見ればただの殺人なのに、何も弁解をしていないところがあまり共感できない。
- ・喜助の独白が長い。喜助は冷淡ではないだろうか。
- ・なぜ弟を殺してしまったのに、嬉しそうなのか。(複数)
- ・「縦から見ても横から見てもいかに楽しそうで、口笛を吹き始めたり鼻歌を歌い出しそうに思われる」という場面がある。弟のことをとても好きだった喜助がその弟を殺した後でそんな行動をどうして起こせるのか疑問に思った。

このような初読の感想をもとに、喜助の犯したことは罪なのかどうかということを課題としていくことも考えられるが、生徒の「喜助」に対する理解・認識(疑問や不可解さ)を基に、「喜助」という人物をし、捉え直す学習課題を設定していきたい。

なぜなら、初読の感想に見られる、生徒の「喜助」に対する理解・認識(疑問や不可解さ)は、視点人物である「庄兵衛」に寄り添った、「喜助」に対する理解・認識であるからである。それでは、作品の特徴である3つの語りの『「喜助」の直接話法による語り』が生かされないと考える。『「喜助」の直接話法による語り』に着目し、「喜助」の出来事(弟殺し)に対する理解・認識に迫ることで、初読時に捉えていた「喜助」との違いに気づき、生徒自身の読みの変容、深まりが促されると考える。また、そのような読書体験が生徒の言葉に対する理解や認識(言葉のもつ価値や限界)を深め、豊かな言語感覚の育成につながると思われる。

本単元では、以下の2点を学習課題とする。

I：喜助の生活は「喜助と弟の出来事」の前後でどのように変化しているか。

II：喜助は「自分の犯したこと」をどのように捉えているか。

単元末では、「喜助」について人物論としてまとめる活動を行う。作品の表現(特に、学習課題で扱った表現)を根拠とし、「喜助」という人物を捉えているかという観点をもって行いたい。

(2) 本指導計画において意識させたい「言語意識」

【 5つの言語意識 】

- ・目的意識 根拠を明らかにして人物論を書くために
- ・相手意識 クラスの仲間に対して
- ・場面状況意識 表現に着目して文学作品を読む場面で
- ・方法意識 対話(他者との交流)を通して
- ・評価意識 根拠を明らかにして人物論を書くことができたか。

(3) 全体研究とのかかわり

①「言葉による見方・考え方」を働かせた学び

言葉による見方・考え方のイメージとして「言葉の意味、働き、使い方等に注目して、言葉によって捉えた対象を問い直し、意味付けること。」が挙げられている。本単元では、グループで探究する小間を設定する際に、「対象」と「その対象をどのような言葉で表現しているのか」ということを意識する。

I：喜助の生活は「喜助と弟の出来事」の前後でどのように変化しているか。

「鬼のすむ所」「二人が離れない」「兄貴に楽がさせたい」

II：喜助は「自分の犯したこと」をどのように捉えているか。

「晴れやかで」「目にはかすかな輝き」「楽しそう」「心得違い」

②「見方・考え方」を働かせるための手立て

・教師による教材研究（教材価値）と生徒の初読の感想を生かした課題設定

指導者の教材研究を踏まえ、教材価値を生かした学習課題を設定する。本単元では、「語り」の構造を意識した学習課題である。また、生徒の初読の感想（気づき）の中にも、教材価値に関わる疑問などもある。その気づきを大切にして学習課題を設定する。そのように学習課題を決定することで生徒には、自己決定感が生まれ、主体的に学習に関わるようになっていくと考えている。

・他者との対話活動

自分とは異なる考えをもつ他者との「対話」によって、自分の考えを相対化し、捉え直し、新たな自分の考えを創造していくことが期待できる。

③「見方・考え方」を働かせた学びの評価の工夫

・1枚ポートフォリオを活用した形成的評価

学習の振り返りを行う場面では、学習を通して「どのような力が身についたのか」また「どのような考えに触れたことが契機となり自分の考えが変容したか」などの思考過程を意識させていく。

・評価規準を明確にした単元の総括的評価

・評価については、学習課題の中から重要と考えた部分を引用し、自分がどのように読んだのかを根拠を明確にして、人物を価値付けているかどうかを観点として行う。

5 日常の取り組み

○学習過程を意識させる

生徒に学習活動を意識させることは、授業に対しての構えをつくらせることができる。「気づく→考える→表現する」という小さな学習サイクルを計画的に仕組む。今年度も、昨年度に引き続き、ポートフォリオを使って、学習活動を振り返ることができるようにしている。

○交流を取り入れた授業

ファシリテーションの考え（他者との協働による知的相互作用の促進）を取り入れ、日々の学習の中で、自分1人で学習を完結させるのではなく、自分の考えを深めるために対話（他者との交流）を通して、自分の考えを表現し、共通点や相違点に気づき、もう一度考えるというサイクルを意識できる。

○ワークシートを活用して、自分の考えを形成する活動

新聞記事を活用したワークシートを使い、社会や日常生活で起きている事柄に対して、自分の考えをもつことができるように、毎日取り組んでいる。国語科の授業と関係のある記事を使用し、事前学習にも活用している。

6 指導の目標

【関心・意欲・態度】

対話を通して、自他の考えを比較して、自分の考えを深めようとすることができる。

【指導事項 読むこと 中3】

Cーウ 対話を通して、自分の考えを深め、構成や展開、表現の仕方について評価することができる。（Cーイ 場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てることができる。）

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項（1）イ（イ）】

心情を表す言葉、人物を描写する言葉などの使い分けに注意し、語感を磨き、語彙を豊かにすることができる。

【言語活動例 中3】

ア 物語や小説などを読んで批評すること。

7 指導計画と評価計画（ C領域「読むこと」46時間中の4時間 ）

(1) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
①対話を通して、自他の考えを比較して、自分の考えを深めようとしている。	①対話を通して、自分の考えを深め、構成や展開、表現の仕方について評価している。(ウ) ②場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立っている。(イ)	①心情を表す言葉、人物を描写する言葉の使い分けに注意し、語感を磨き、語彙を豊かにしている。 ((1) イ (イ))

(2) 学習過程の概要

単元(教材)名		読書教材（ 森 鷗外「高瀬舟」 ） 〈 4時間計画 〉				
言語活動例		ア 物語や小説などを読んで批評すること。				
指導事項		単	学 習 活 動	評 価 規 準	時	
ア	【語句の意味の理解】 文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。	「喜助」とはいったい何者なのか？	・単元の目標を理解し、「高瀬舟」を通読し、作品の内容をとらえ、初読の感想を書く。 (事前) 新出漢字や難解語句について調べる。	関心・意欲・態度①	1	
			・初読の感想や生徒の気づきをもとにして、全体で共有しながら、小問を設定する。		2	
イ	【文章の解釈】 場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容の理解に役立てること。		○	・学習課題Ⅰ・Ⅱについて、分担を決めて、考えを交流しながら解決し、自分の考えをもつ。	読むこと② 関心・意欲・態度① 言語①	3
ウ	【自分の考えの形成】 文章を読み比べるなどして、構成や展開、表現の仕方について評価すること。		◎	・前時のグループでの考えをもとに、「喜助」とはいったい何者なのか？)について、グループの考えをまとめ、全体で発表し、検討する。 (家庭学習) 「喜助」の人物論を書く。 ・全体で読み合い、感想を交流する。	読むこと① 関心・意欲・態度①	4
						5
エ	【自分の考えの形成】 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。					
オ	【読書と情報活用】 目的に応じて本や文章などを読み、知識を広げたり、自分の考えを深めたりすること。					
関連する〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕		(1) イ (イ) 心情を表す言葉、人物を描写する言葉などの使い分けに注意し、語感を磨き、語彙を豊かにすることができる。				

8 本時の展開 (第三次 4時【4/4時間目】)

- (1) 日時 平成30年6月30日(土)
 (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 図書室
 (3) 目標 対話を通して、『二人の沈黙』の意味するものは?』について、自分の考えを深めている。
 (4) 展開

	学習活動	指導上の留意点	評価について
つかむ	1 これまでの学習を振り返り、本時の目標を知る。(5分) <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 学習課題 『喜助』とはいったい何者なのか? </div>	・前時までの学習を振り返り、それぞれが自分の考えを積極的に発言し、考えを深めることを確認する。	
深める	2 グループで考えた考えとその根拠をそれぞれが発表し、質疑応答をする。(5分) 3 グループでの考えをもとに、学習課題についてグループでの考えをまとめる。(20分) 4 各グループが1分間プレゼンを行い、各グループの考えを検討する。(15分)	・グループ内の記録として、模造紙を配布し、そこに箇条書きで記入させる。(図やイラストも可) ・相手の考えに対して質問はよいが、非難はさせない。 ・グループ内の記録として、自由に書き込みをさせる。 ・相手の考えに対して質問はよいが、非難はさせない。 ・自分たちのグループの考えを1分間プレゼンすることを伝え、準備の時間(5分間)を知らせる。 ・教師が進行役となり、全体でグループでの考えを発表させる。	関① 読①
考える	4 本時の学習をまとめ、家庭学習の内容を聞く。(5分)	・本時の学習のまとめをポートフォリオに書かせる。 ・本時の学習をもとに、人物論を家庭学習で書いてくることを伝える。	読①

参考文献

教材研究に関しては以下の文献を参考にしている。

田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年』(教育出版 2001, 6, 17)

齊藤知也 『教室でひらかれる〈語り〉—文学教育の根拠を求めて』(教育出版 2009, 8, 8)